

(続紙 1)

京都大学	博士 (教育学)	氏名	萬木 (岩宮) 恵子
論文題目	事例から見る現代の思春期心性		
<p>(論文内容の要旨)</p> <p>思春期は、心理臨床のなかでも重要な課題を呈する時期であり、その心性は複雑であるとともに、興味深いものである。また、思春期は社会の変化にもっとも敏感な時期でもあり、SNSの普及に見られるような、現代のコミュニケーションのあり方を反映して、現代の思春期心性は、過去のものとは異なってきている。ただ、一方で、時代を通じて変わらぬ思春期心性も存在する。</p> <p>本論文は、こうした時代性を通観しながら、思春期心性に踏み込み、また、事例を通して、その具体的な様相を明らかにしようとしたものである。</p> <p>まず第一章では、心理学からだけでなく、進化学、脳科学、精神病理学などから、思春期についての科学的な研究をとりあげて概説している。また、思春期心性への様々なアプローチがあるなかで、事例研究という方法論を本論文で採用することの意味や意義についても、その根拠を述べ、さらに、本論文では、現代の小説や物語、そして漫画作品なども取り上げているが、心理療法において物語研究をすることの意味と意義についても述べている。</p> <p>続く第二章では、現代の思春期心性の特徴として、自分の人間関係のスキルで自力で共同体を作らねばならなくなっている現状について、事例をもとに指摘している。</p> <p>第三章では、子どもたちの集団のありようが変化しているなかで、旧態依然とした生徒指導が、いかに子どもの心から遠いものになっているのかについて事例から指摘し、一方で、現代においても学校行事が思春期の子どもたちにとって、見事なイニシエーションの場になる可能性についても事例から考察している。</p> <p>一方、第四章・第五章では、文学作品や漫画作品、『遠野物語』をテキストとして、思春期と「異界」のかかわりの表現をさまざまな文学作品のなかに見出しながら、思春期の子どもたちが自分自身の「生」の起源を求める感覚などについても論じた。第五章ではさらに、ネットとリアルが接点をもった瞬間に生じた思春期危機のありようを、ネット依存の事例を紹介しながら考察している。</p> <p>第六章・第七章では、現代のひきこもり研究について概説したのち、不登校から、ひきこもりになった全緘黙の事例が回復していったプロセスをイニシエーションの視点を踏まえて紹介し、また、鬼や魍魎魍魎として表わされてきた日本古来の異界の否定的な側面から、現代の思春期の事例について考察した。</p> <p>第八章・第九章でも、事例を元に思春期心性を論じた。第八章では、唾液も飲めない</p>			

拒食の少女の事例を提示しながら、「かぐや姫の物語」と症状の消失との関係について論じ、第九章では、不登校の娘を持つ母親の面接プロセスを時系列で追いながら、その面接のなかで起こっていたことを、村上春樹の作品世界とリンクさせながら論じている。特に、思春期の娘への深い共感が開けていくとき、親自身の思春期の記憶が立ち上がることもあることや、次元の違う現実に関心が向くようになるプロセスに関して考察した。そして思春期の親の年代の人たちの面接のなかで、中年以降の年齢なのに思春期心性が動いている事例に出会うことが増えて来ていることなどについても論じている。

終章では、社会が急激な変化をし続けているなか、すべての年代に思春期心性が見出せるようになってきているとも言えるため、イニシエーションにおけるコムニタスの希求のテーマが、薄く拡散し、表層的な「関係性の話題」という形に姿を変えて臨床場面に登場してきていると事例から論じた。

(論文審査の結果の要旨)

思春期は、心理臨床のなかでも重要な課題を呈する時期であり、その心性は複雑であるとともに、興味深いものである。また、思春期は社会の変化にもっとも敏感な時期でもあり、SNSの普及に見られるような、現代のコミュニケーションのあり方を反映して、現代の思春期心性は、過去のものとは異なってきている。ただ、一方で、時代を通じて変わらぬ思春期心性も存在する。

本論文は、こうした時代性を通観しながら、思春期心性に踏み込み、また、事例を通して、その具体的な様相を明らかにしようとしたものである。著者は、これまですでに、「生きにくい子どもたち—カウンセリング日誌から—」(岩波書店)や、「思春期をめぐる冒険—心理療法と村上春樹の世界—」(日本評論社)など多数の著書を著し、それらは文庫化されたり中国語に翻訳されるなど、すでに世に広く膾炙している。本論文は、それらを元にさらに考えを深化させ、「現代の意識」に焦点付けながら、思春期に迫ろうとする、意欲的な論考である。

本論文の問題意識はきわめて現代的であるとともに、「時代を超えてトラッドな心の有り様があるのか」という、心をめぐる根本的な疑問にも触れており、たいへん興味深い。

また、このテーマを追究するにあたって著者は、数多くの事例を呈示している。これらは、著者の長年に亘る、大学病院の精神科、スクールカウンセラー、そして、大学の心理相談室での、膨大な数の心理臨床実践が基盤となっており、いずれもが素晴らしい実践報告であった。このことは、本論文の論述を基礎づけるものであり、説得力を有することはもちろん、心理臨床の現場において、非常に有用な知識、見方を提供するものとして、高く評価できる。

本論文でとりあげられている、現代の学校の状況や人間関係の持ち方からは、過去とは大きく異なる特徴が明快に示されており、旧態依然とした生徒指導が、いかに子どもの心から遠いものになっているのかについて痛感させられた。一方で、現代においても学校行事が思春期の子どもたちにとって見事なイニシエーションの場になる可能性についても言及されており、過去と現代の思春期に通底する心性がリアルに感じ取られた。

さらに、本論文のなかでは、数多くの文学作品、漫画作品が取り上げられ、思春期の心の世界、特に、思春期と「異界」のかかわりの表現をさまざまな文学作品のなかに見出している。思春期のころは複雑であり、「言葉」にして語る事が難しい。そうした複雑な心性を表現すべく、「物語」という手段を使ったことによって、その有様を見事に描き出すことに成功している。また、個人の事例に留まらない、普遍的な心の有り様を表現することになり、本論文に深みと彩りを加えることとなった。

また、終章においては、思春期の時期だけではなく、社会が急激な変化をし続けているなか、すべての年代に思春期心性が見出せるようになっているという指摘もあり、よりダイナミックな思春期心性にも言及されている点に、本論文のさらなる発展可能性も見いだせると考えられた。

よって、本論文は博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。また、令和元年5月30日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、（期間未定）当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日： _____ 年 _____ 月 _____ 日以降